Osaka University Knowledge Archive

Title	劃線小考 : 北京簡『老子』と清華簡『繫年』とを中心に
Author(s)	竹田, 健二
Citation	中国研究集刊. 2013, 57, p. 126-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58651
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊 巨号（総五十七号）平成二十五年十二月 一二六―一四四頁

劃線小考

―北京簡『老子』と清華簡『繫年』とを中心に―

竹田健二

はじめに

北京大学が二〇〇九年に収蔵した前漢時代の竹簡（以下、北京簡）において、孫沛陽氏が複数の竹簡の背面に連続する「劃線」、或いは「劃痕」と称される線（以下、劃線）を発見したことを契機として、劃線は近年、竹簡の配列を復原する上で重要な手掛かりとなる可能性があるものとして注目を集めている(注1)。北京簡『老子』の劃線に関しては、その後韓巍氏が孫沛陽氏の見解を踏まえて「西漢竹書《老子》簡背劃痕初歩分析」（『北京大学蔵西漢竹書（貳）』〔上海古籍出版社、二〇一二年〕所収）を発表し、北京簡『老子』の劃線は竹簡が完成した後に竹簡上に記されたものではなく、竹簡の素材である竹筒の段階で螺旋状に記されたものであると指摘した(注2)。

これに対して何晋氏は、二〇一二年十一月十七～十九日に武漢大学簡帛研究中心と北京大学出土文献研究所の共催で開催された『中國簡帛學國際論壇二〇一二秦簡牘研究』の会議論文集に収められている論文「浅議簡冊制度中的〝序連〟―以出土戰國秦漢簡爲例」の中で、韓巍氏の見解が北京簡『老子』に見られる劃線の状況をよく説明するものであることを認めつつも、劃線が認められる他の資料から見るならば、北京簡『老子』は特殊な事例であり、その見解は支持できないと述べている。

そこで小論では、韓巍氏の見解に対する何晋氏の批判を手がかりとして、劃線に関する新たな知見を得るべ

く、北京簡『老子』の劃線と『清華大学蔵戦国竹簡（貳）』（中西書局、二〇一一年）所収の『繫年』（以下、『繫年』）の劃線とを中心に検討する。

一、北京簡『老子』の劃線

本章では、先ず韓巍氏の劃線に対する見解を確認しておく。

前述の通り韓巍氏は、北京簡『老子』の劃線は、竹簡が完成した後に竹簡上に記されたものではなく、竹簡の素材である竹筒の段階で螺旋状に記されたとする。この見解の根拠となっているのは、北京簡『老子』の竹簡の中に、二本の概ね平行する劃線が記されているものが含まれていることである。劃線が二本記された竹簡は、二二一枚の中に一九枚確認されており、各竹簡における二本の劃線の位置はすべて、一本が竹簡の上端近く、もう一本がその下方の、竹簡の中央部近くである（注3）。

例えば、北京簡『老子』上経の簡1～簡18は、図1・下段の図のように、簡1と簡18とに二本の劃線が、簡2～17に一本の劃線がそれぞれ記されている（注4）。簡1の上方の劃線は簡2～17の劃線と、また簡2～17の劃線は簡18の下方の劃線と、いずれもよく連続する。

注目すべき点は、簡18の上方の劃線が簡1の上方の劃線とよく連続し、同時に簡18の下方の劃線が簡1の下方

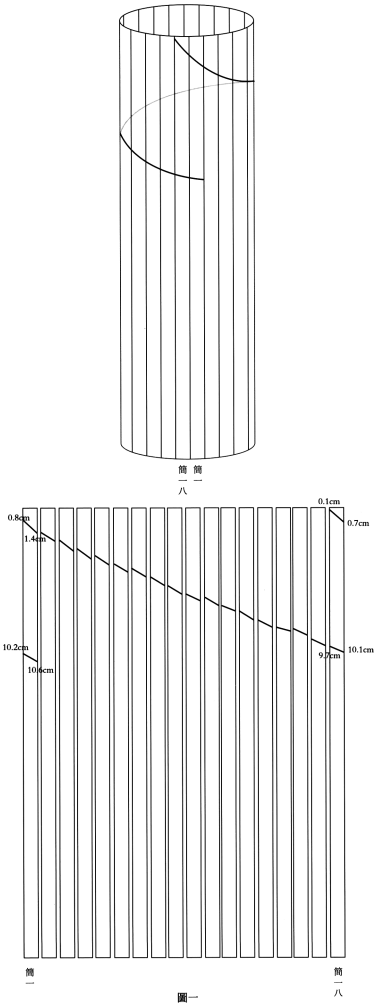

図1　北大簡『老子』上経第1劃線の竹簡群

の劃線ともよく連続する点である。韓巍氏は、もともと簡1から簡18の一八枚の竹簡が円環をなしていたとするならば、簡18・簡1の二本の劃線がそれぞれよく連続することを説明できることに着目し、こうした劃線の状況から、劃線は竹簡の素材である竹筒の段階で記されたと見なした。すなわち、図1・上段の図のように、劃線は竹筒の上の簡18の竹簡上端のところから、螺旋状に下降する形で一周して記され、引き続き簡18・簡1の竹簡中央部近くまで記されて終わっており、こうした劃線が記された後に竹筒が裂かれて一八枚の竹簡が作成された結果、簡1・簡18には二本、簡2～17には一本の劃線がそれぞれ記される形になった、とするのである。

北京簡『老子』の劃線を竹簡の作成過程と関連付け、連続する劃線の記されている竹簡のまとまり（以下、竹簡群）は円環をなし、もともと一つの同じ竹筒であったとする韓巍氏の見解に基づき、北京簡『老子』の劃線の状況をまとめたものが、表1及び表2である。この表は、韓巍氏の論文に示されている表を踏まえて、筆者が「劃線の連続性」欄を追加して作成した。各竹簡群の「劃線の連続性」欄には、劃線の位置が竹簡の上端に最も近いものから順に、劃線の連続性に沿って簡号を示した。劃線が二本ある竹簡については、波線の下線が付してあるものが上方の劃線、二重線の下線を付してあるものが下方の劃線を指す。また、各竹簡群の中で、復元された配列において一番先頭に位置する竹簡は、簡号を□で囲った。なお、簡号が連続する部分については中間部分を一部省略した。また、簡84と簡187とには劃線が認められないが、韓巍氏の表に従い、「（　）」を付した上で含めてある。

北京簡『老子』上経の第6劃線及び下経の第3劃線が記されている竹簡群の中には、二本の劃線が記された竹簡が含まれていないが、韓巍氏はそれらも合わせて、上経の八組、下経の六組、合計一四組の竹簡群が、いずれもそれぞれが同一の竹筒から作成されたものと見なしている。

なお、各竹簡群の中で、『老子』上経第8劃線の竹簡群のみは、竹簡数が六枚と少ない。この点について韓巍氏は、同じ竹筒から作成された竹簡はこの六枚以外に存在していたはずであり、それらは他のところで利用されたか、或いは廃棄されたとし、この竹簡群のみは、同一の竹筒から作成された竹簡の揃っていない、不完整のものと見なしている(注5)。

興味深い点は、竹簡群の中で劃線の位置が最も竹簡上端に近く、従って竹筒の上で劃線の始まったところと見

表1　北京簡『老子』上経の劃線一覧

『老子』上経			
劃線	簡号	簡数	劃線の連続性
1	1－18	18	18-1-2-3-4-（中略）-15-16-17-18-1
2	19－34	16	34-19-20-21-22-（中略）-30-31-32-33-34
3	35－53	19	53-35-36-37-38-（中略）-50-51-52-53-35
4	54－70	17	69-70-54-55-56-（中略）-66-67-68-69-70
5	71－86	16	86-71-72-73-74-（中略）-83-（84）-85-86-71
6	87－100	14	100-87-88-89-90-（中略）-95-96-97-98-99
7	101－117	17	116-117-101-102-103-（中略）-112-113-114-115-116
8	118－123	6	118-119-120-121-122-123

表2　北京簡『老子』下経の劃線一覧

『老子』下経			
劃線	簡号	簡数	劃線の連続性
1	124－141	18	124-125-126-127-128-（中略）-138-139-140-141-124
2	142－157	16	157-142-143-144-145-（中略）-154-155-156-157-142
3	158－174	17	158-159-160-161-162-（中略）-170-171-172-173-174
4	175－188	14	188-175-176-177-178-（中略）-185-186-（187）-188-175
5	189－204	16	189-190-191-192-193-（中略）-202-203-204-189-190
6	205－221	17	221-205-206-207-208-（中略）-217-218-219-220-221

られる竹簡が、復元された配列においては一番先頭に位置するとは限らず、二番目もしくは三番目に位置することが多いという点である(注6)。例えば、先に見た上経の第1劃線の竹簡群の場合、竹簡群の中で劃線の位置が最も竹簡の上端に近いのは簡18であるが、竹簡の配列を復原した後に先頭に位置するのは簡1であり、簡18ではない。しかし、下経の第1劃線の場合は、竹簡群の中で劃線の位置が最も竹簡の上端に近いのも、また竹簡の配列を復原した後に先頭に位置するのも、いずれも簡124である。

この点について韓巍氏は、円筒である竹筒のどの竹簡を先頭とするのかは完全に任意であったためであるとし、「製簡工匠」、つまり竹簡の製造にあたった職人は、意識的に劃線の位置が竹簡の上端に近いものから竹簡を配置し、できるだけ劃線の連続性を保っていると見なしている。

次章では、こうした韓巍氏の見解に対して批判的である、何晋氏の見解を確認する。

二、何晋氏の見解

何晋氏は、韓巍氏の見解について以下のように述べている。

這一推論雖然能很好地解釋漢簡《老子》背劃綫的現象，但我對此持懷疑態度，因爲從更多其他的背劃綫資料看，並不支持這一推論。首先從簡數上看，漢簡《老子》一組完整的背劃綫劃過的16至19支簡也許能正好湊成一個竹筒，但《妄稽》簡每組背劃綫卻祇劃過9支左右，而《老子》簡與《妄稽》簡的簡寬是一樣的，所以《妄稽》簡每組9支只能組成半個竹筒；此外清華戰國簡（貳）中一組背劃綫是25支簡左右，而嶽麓秦簡（壹）中《三十四年質日》、《三十五年質日》中的一組背劃綫有多達33、35支的，它們則不可能由一個竹筒製成。其次從竹節位置看，清華戰國簡（壹）中《耆夜》篇簡一〇與一一、一二的竹節位置完全不同，但三簡的背劃綫卻能連貫一致，這說明背劃綫不是在同一個竹筒上完成的，而是在破筒製簡後將許多簡排鋪在平面上刻劃的。另外，一些木簡也發現有背劃綫，這就更與螺旋劃簡的方式無關了。如果我們不承認背劃錢在製作方式上具有普遍性和軌范性，那麼也可以把上述方式視爲《老子》背劃綫製作的特殊方式。

すなわち、何晋氏は、韓巍氏の見解が北京簡『老子』に見られる劃線の状況をよく説明するものであることを認めつつも、劃線が認められる他の多くの資料から見るならば、北京簡『老子』は特殊な事例であり、韓巍氏の見解は支持できないとする。

その理由は、第一に、竹簡数の問題である。北京簡『老子』の各竹簡群に属する竹簡が一六～一九枚であるのに対して、同じ北京簡の『妄稽』は各竹簡の簡幅が北京簡『老子』とほぼ同じであるにもかかわらず、連続する劃線の記されている竹簡群に含まれる竹簡がわずか九枚前後しかないと何晋氏は指摘する。また、清華簡の『繫年』においては、一本の劃線が竹簡二五枚前後にまたがって連続して記されていること、更に二〇〇七年に湖南大学岳麓書院が収蔵し、『岳麓書院蔵秦簡〔壹〕』（上海辞書出版社、二〇一〇年）によって公開された竹簡資料（以下、嶽麓秦簡）中の『三十四年質日』・『三十五年質日』においては、一本の劃線が竹簡三三・三五枚にまたがって連続して記されていることを挙げ、これらについても一つの竹筒から作成された竹簡群であると見なすことはできないと指摘する。

第二に、竹節の位置と劃線との関係の問題である。何晋氏は、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』（中西書局、二〇一〇年）に収められている清華簡『耆夜』の簡10・11・12の三簡において、連続する劃線が、竹節の痕跡の位置が異なる竹簡の上にまたがる形で記されているとし、このことは、劃線が竹筒の上で記されたものではなく、竹筒が裂かれて竹簡が作成された後に、竹簡が平らに並べられた上で記されたものであることを示していると主張する。

なお、この清華簡『耆夜』の劃線に関しては、何晋氏は下記のように注記している。

> 其中簡一〇沒有明顯的背劃綫，但有與簡一一、一二背劃綫斜度、方向一様的整齊斷口，我認為這個斷口就是背劃綫劃過的地方。

すなわち、実は清華簡『耆夜』簡10においては、はっきりと劃線が認められるわけではない。簡10に起きている断裂の向きが簡11・12の劃線の向きと概ね一致しており、ちょうど簡11・12の劃線の延長線上で断裂しているように見えることから、何晋氏は、簡10の断裂は、劃線の存在したところで、劃線に沿う形で起きたと見なしているのである。

この他に何晋氏は、木簡にも劃線が存在するものがあ

ることを指摘し、そうした木簡の劃線は、当然螺旋状に記されたものではないとする。

以上、何晋氏による、韓巍氏の見解に対する批判の内容を確認した。

北京簡『老子』の竹簡背面の状況については、整理者によって描かれた図のみ公開されており、残念ながら写真により確認することはできない。しかし、北京簡『老子』の劃線の状況が前章に述べた通りであるとするならば、背面に二本の劃線がある竹簡を手がかりとして、劃線は竹簡が形成される前の竹筒の段階で螺旋状に記されていたとする韓巍氏の見解は、極めて蓋然性が高いと筆者は考える。

それでは、劃線が認められる他の資料と合わせて考えるならば、何晋氏が言うように、やはり北京簡『老子』は特殊な事例と見なすべきなのであろうか。

私見では、北京簡『老子』の劃線は、『繫年』の劃線との間に共通点が認められ、『繫年』の劃線もやはり竹筒の段階で螺旋状に記されていたものと考えられる。そこで次章では、『繫年』の劃線について検討を加える。

三、『繫年』の劃線

『繫年』の劃線については、既に李均明・趙桂芳両氏の論文「清華簡文本復原—以《清華大学蔵戦国竹簡》第一、第二輯爲例」（『出土文献』第三輯、二〇一二年）が、以下の七本の劃線が認められると指摘している。

第1　簡1～簡22（第1章～第4章）
第2　簡23～簡44（第5章～第7章）
第3　簡45～簡70（第8章～第14章の一部）
第4　簡71～簡95（第14章の一部～第17章）
第5　簡96～簡120（第18章の大部分～第22章の始めの二簡）
第6　簡121～簡134（第22章の大部分～第23章）
第7　簡135～簡138（第23章の終わりの四簡）

しかし、前出の何晋氏の論文「浅議簡冊制度中的〝序連〟—以出土戰國秦漢簡爲例」においては、『繫年』の劃線が以下のように捉えられている。

第1　簡1～簡25
第2　簡26～簡44
第3　簡45～簡69
第4　簡70～簡95

第5　簡96～簡120
第6　簡121～簡134
第7　簡135～簡138

『清華大学蔵戦国竹簡（貳）』所収の写真を検討した結果、筆者は、李均明・趙桂芳両氏の見解には問題があると考える。何晋氏による劃線の把握については、基本的には賛同できるものの、やはり一部に問題があると考える。

李均明・趙桂芳両氏は、その論文に示されている図からも窺えるように、『繫年』の或る一枚の竹簡上に記されている劃線をすべて一本だけと捉えている。この点が特に問題である(注7)。確かに『繫年』の竹簡は、背面に劃線が一本のみ認められるものが大部分を占めているが、中にはその背面に劃線が二本記されている竹簡も存在している。

この点に関して何晋氏は、簡45・簡96・簡97の三枚には二本の劃線が存在しているとしている。しかし、『繫年』において二本の劃線が存在している竹簡はこの三枚に止まらず、簡1・45・70・71・96・97の合計六枚と理解すべきである。

基本的に『繫年』においては、何晋氏の指摘する七本の劃線がよく連続しているものと認められる。その劃線の連続性について細かく見るならば、下記の点が注目される。

先ず、『繫年』簡63・64には劃線が確認できない。但し、両簡には竹簡の残欠している部分があり、前後の竹簡の劃線から見て、両簡の残欠した部分に劃線が記されていた可能性がかなり高いと考えられる。

また、『繫年』の簡8・簡60にも劃線が認められない。しかし、『清華大学蔵戦国竹簡（貳）』の写真を見る限り、両簡は他の竹簡と比較して変形や変色が激しいように見受けられる。同書に収められている両簡の竹簡正面の写真に赤外線写真が用いられているのも、両簡の変形が激しかったためと推測される。あくまでも推測に過ぎないが、両簡に劃線が確認できないのは、竹簡の変形のためであり、劃線自体はもともと存在した可能性も十分にあると考えられる。

なお、『繫年』簡8について何晋氏は、竹簡背面の竹節の痕跡の位置が前後の竹簡と異なっており、明らかに後から挿入されたものであるとしている。しかし、簡8の変形、特に簡長の縮小を考慮するならば、その竹節の位置は前後の竹簡と同じと見なすべきと考えられる。

更に、簡44の劃線は、簡26～簡43に認められる第2劃線とも、また簡45～簡69に認められる第3劃線とも連続

していない。劃線はこの部分で大きくずれる形になっており、『繫年』において劃線の連続性を欠く例外的な部分と認められる。

この部分で劃線の連続性が欠けている理由については、今後更に慎重に検討する必要があるが、可能性としては、書写や編聯の段階で誤写や竹簡の破損が起こり、別の竹筒から作成された竹簡が用いられた、といったことが考えられよう(注8)。

但し、後述する竹節の痕跡の位置から見ると、簡44は簡26～43とその位置・数が同じであるため、別の竹筒から作成された竹簡ではない可能性も考えられる。簡44の劃線の位置は、写真を見る限りでは、簡37と簡38との間あたりに位置する可能性もあるように見受けられ、そうであれば、書写や編聯の段階で順番を誤ったとの可能性も考えられよう(注9)。

加えて、『繫年』の簡135について、『繫年』の末尾の部分にあたる簡135から簡138までの四簡は、『老子』上経第8劃線の竹簡群と同様、同一の竹筒から作成された竹簡が揃ってはいない不完整のものということになるが、この簡135には、竹簡の上端から簡長の約五分の一程度下方に劃線が一本存在している。何晋氏は、簡135のこの劃線が前後に位置する簡134・簡136の劃線とそれぞれ連続しないことから、簡44の部分だけでなく、ここでも劃線に大きなずれが生じていると見なしている。

しかし、写真から明らかなように、この竹簡は、竹簡上端から第1編綫までの部分が残欠している。この簡135の残欠について何晋氏は、氏が論文中に示す竹簡と劃線の図からも窺えるように、まったく考慮していない。簡136以降の竹簡背面の劃線の状況から判断するならば、簡135にはもともと、簡136以降の竹簡背面の劃線と連続する劃線が存在していた可能性が高いと考えられる。そうであれば、簡135は劃線が二本記されていた竹簡の一つということになる。

以上のように、『繫年』においては、簡44に関してだけ例外的に劃線の連続性を欠くと認められるが、その他の部分については各劃線の連続性は保たれており、その七本の劃線は全体として非常によく連続しているものと見なしてよい。

続いて、二本の劃線が記されている竹簡について検討する。なお、前述の通り簡135も劃線が二本記されていた竹簡の一つであったと推測されるが、『繫年』簡135から簡138までの四簡は文献の末尾に位置し、不完整である竹簡群と考えられるため、ここでは検討の対象から除外する。

『繫年』簡1・45・70・71・96・97における二本の劃線は、その内の一本は竹簡の上端近くに位置し、もう一本の劃線はその下方、竹簡の中央部近くに位置している。従って、『繫年』と北京簡『老子』とは、一部の竹簡に劃線が二本記されているという点に加えて、その二本の劃線の竹簡上の位置について、上方のものは竹簡の上端近く、下方のものは竹簡の中央部近くであるという点でもよく共通している。

結論から言えば、韓巍氏の見解は『繫年』の劃線についても適合し、『繫年』の竹簡背面にある劃線も北京簡『老子』の劃線と同様に、それぞれの竹簡が形成される前に竹筒の段階で螺旋状に記されたものであり、『繫年』において連続する劃線が記されている各竹簡群は、それぞれ同一の竹筒から作成されたと考えられる。

このことについては、既に韓巍氏の論文の注［六］においても、「據清華大學出土文獻保護與研究中心沈建華先生介紹，清華簡《繫年》的簡背劃痕應該是刻劃在竹筒上的（孫沛陽在與筆者交流時也提出同様地意見）」と述べられており、また同注［一〇］においても、「清華簡《繫年》的劃痕很可能也是先刻劃在竹筒上的」との孫沛陽氏の見解が引用されている。しかし、『繫年』の劃線に関する具体的な状況等については触れられていない。そこで、以下詳しく見ていくことにする。

前述した『繫年』の七本の劃線の状況を、北京簡『老子』を検討した際に作成したものと同様の表にまとめたのが、表3である。なお、上述の簡44、及び簡8・簡60、簡135については、それぞれ「（ ）」を付して表に含めてある。

『繫年』の中の、劃線が二本存在している簡1・45・70・71・96・97の六枚を中心に、それぞれの劃線の連続性を見てみるならば、先ず簡1について、その上方の劃線は簡2以下の劃線とよく連続しており、また簡25の劃線と簡1の下方の劃線ともよく連続する。簡25の劃線と簡26の劃線とは、位置が大きくずれており、連続すると見なすことはできない。

簡45について、簡45の上方の劃線は簡46以下の劃線とよく連続しており、また簡69の劃線と簡45の下方の劃線ともやはりよく連続する。なお、簡45の下方の劃線は、簡44とは位置がかなり離れており、連続するとは見なしがたい。

簡70・簡71について、簡70・簡71の上方の劃線と下方の劃線とは、それぞれよく連続している。そして、簡70・簡71の上方の劃線は簡72以下の劃線ともよく連続している。更に簡95の劃線と簡70・簡71の下方の劃線とが

表3　『繫年』の劃線一覧

『繫年』			
劃線	簡号	簡数	劃線の連続性
1	1－15	25	1-2-3-4-5-（中略）-22-23-24-25-1
2	26－44	18	26-27-28-29-30-（中略）-40-41-42-43-(44)
3	45－69	25	45-46-47-48-49-（中略）-66-67-68-69-45
4	70－95	26	70-71-72-73-74-（中略）-93-94-95-70-71
5	96－120	25	96-97-98-99-100-（中略）-118-119-120-96-97
6	121－134	14	121-122-123-124-125-（中略）-130-131-132-133-134
7	135－138	4	(135)-136-137-138

やはりよく連続する。なお、簡95の劃線は、簡96の劃線とは位置がずれており、連続するものとは見なしがたい。

簡96・簡97について、簡96・簡97の上方の劃線と下方の劃線はよく連続している。そして、また簡120の劃線と簡96・簡97の下方の劃線もやはりよく連続する。なお、簡120の劃線は、簡121の劃線とは位置がずれており、連続するものとは見なしがたい。

以上のことから、それぞれ二本の劃線が記されている簡1・45・70・71・96・97は、よく連続する劃線の記されている各竹簡群がもともと円環をなし、各竹簡群はやはり同一の竹筒から作られたものであることを示しており、各劃線は竹簡の形成される前に、竹筒の段階で螺旋状に記されたものと見てよいと考えられる。第2・6・7の各劃線の竹簡群については、一枚の竹簡上に二本の劃線が記されているものが含まれていないが、他の竹簡群の状況から判断するならば、これらもおそらく、それぞれもともと同一の竹筒から作られた竹簡群と見てよいと推測される。

『繫年』において連続する劃線の記されている竹簡群が、それぞれ同一の竹筒から作成されたものであることを傍証すると見られるのが、各竹簡群の中の竹簡は、竹簡背面の竹節の痕跡の数及び位置がすべて一致している

という点である。周知の通り、清華簡の竹簡背面には、竹節を削り取ったとみられる痕跡が認められる。『繫年』の場合、どの竹簡も竹節の痕跡は一箇所だが、その位置の違いから、用いられている竹簡は六種類に区分することができる。

注目すべき点は、『繫年』において劃線が連続して記されているそれぞれの竹簡群には、竹節の痕跡から見て同じ種類の竹簡のみが用いられており、竹節の痕跡から見て異なる種類の竹簡との混在が認められないという点である。このことは、よく連続する劃線の記されている各竹簡群が同一の竹筒から作成されたものである可能性の高いことを示していると思われる。

もっとも、『繫年』において、第1劃線の竹簡群と第2劃線の竹簡群とは、各竹簡の竹節の位置がほぼ同じであることからも分かるように、竹節の位置や数が同一である竹簡のすべてが同一の竹筒から作成された竹簡であるわけではない。しかし、竹節の位置及び数から見た竹簡の種類の分類と、劃線の連続性との間に、かなり緊密な関係が認められることは確実である。また、仮に『繫年』の連続した劃線が記されている各竹簡群が、同一の竹筒から作成されたものではなく、異なる竹筒から作成された竹簡の混在しているものだとするならば、先述の一枚の竹簡上に二本の罫線が記されている現象について、何故そうした現象が生じたかという点について、新たに別の整合的な説明を加えなければならないことになる。

『繫年』においては、劃線が連続して記されている各竹簡群に、竹節の痕跡の位置の異なる種類の竹簡の混在が認められず、そして清華簡においては、後述するように劃線が竹節の位置から見て異なる種類竹簡をまたぐ形で連続するという現象が認められないことからすると、『繫年』の七つの竹簡群は、それぞれ同一の竹筒から作成されたものと見てよいと考えられる。

以上、本章では『繫年』の劃線について検討を加え、『繫年』において認められる七本の劃線も、北京簡『老子』と同様に、竹簡が形成される前の竹筒の段階で螺旋状に記されたものと考えられることを述べた。

なお、北京簡『老子』と『繫年』とでは、各劃線が記されている竹簡群の中で、劃線の始まったところと見られる竹簡と、復元された配列において先頭に位置する竹簡とが、一致しているかどうかという点で違いが見られる。すなわち、先述の通り、北京簡『老子』の場合は、劃線の始まったところと見られる竹簡が、復元された配列では先頭に位置しない場合がほとんどであった。しか

し『繫年』の場合は、劃線の始まったところとみられる竹簡が、いずれも復元された配列において先頭に位置している。こうした両文献の違いの意味するところについては、なお慎重な検討を要するが、そもそも竹簡正面の文字列と竹簡背面の各劃線群とは、対応しているわけではない(注10)。書写や編聯の段階において竹簡を配列するにあたっては、同一の竹筒から作成された竹簡群の中で、おおよそ劃線の位置が竹簡の上端に近いものから順に用いられたが、必ず劃線の開始部分の竹簡を先頭に配列しなければならなかったわけではなかったものと推測される。

次章では、以上のことを踏まえて、改めて何晋氏による批判について検討する。

四、連続する劃線の一方式

先述の通り、何晋氏は韓巍氏の見解が北京簡『老子』に見られる劃線の状況をよく説明するものであることを認める一方で、北京簡『老子』の劃線の状況を特殊な事例とした。しかし、北京簡『老子』の劃線の状況と『繫年』の劃線の状況がよく類似し、両文献において連続する劃線が記されている各竹簡群は、いずれも同一の竹筒から作成されたものと考えられることから、北京簡『老子』は特殊な事例と見なすべきではないと考えられる。

両文献の他にも、実は清華簡『金縢』において、背面に二本の劃線が記されている竹簡が存在しており、この清華簡『金縢』の一四枚の竹簡も、北京簡『老子』・『繫年』の連続する劃線が記されている各竹簡群と同様に、同一の竹筒から作成されたものと見なしてよいと考えられる。

すなわち、図2に示す通り、『金縢』簡1～3には、竹簡の上端近くとその下方との二カ所に劃線がある。簡

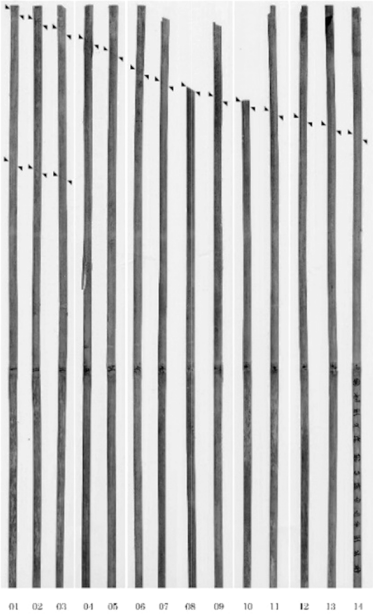

図2　清華簡『金縢』の劃線

1～3の上方の劃線は、その後の簡4～簡14の劃線と概ねよく連続している。しかも簡4～簡14の劃線は、簡1～3の下方の劃線と概ねその角度が等しく、全体として連続すると見なしてよいと考えられる。ちなみに、竹簡背面の竹節を削り取った痕跡について見るならば、一四枚の竹簡はすべて、竹節の痕跡の位置及び数が同じである。

もっとも、簡14の劃線と簡1の下方の劃線とは若干ずれており、この竹簡群が円環をなすとすれば、簡14と簡1との間に二枚程度の竹簡が入るように見受けられる。この点については、『金縢』の竹簡群は、『繫年』末尾の第7劃線の竹簡群や北京簡『老子』上経末尾の第8劃線の竹簡群と同様に、同一の竹筒から作成された竹簡が揃っていない不完整のものであり、不足すると見られる二枚程度の竹簡は廃棄されたか、他に利用されたものと思われる。

以上のように、北京簡『老子』・清華簡『繫年』及び同『金縢』は、よく連続する劃線が認められる竹簡群の中に、劃線が二本記されている竹簡を含んでいる点で共通性が認められ、連続する劃線の記されている竹簡群は、いずれも同一の竹筒から作成されたものと考えられる(注11)。

もとより、本稿執筆時点で公開済みの清華簡の中には、『保訓』や『祭公』、『芮良夫毖』のようにほとんど竹簡の劃線が認められない文献もあり、また一部の竹簡にしか劃線がない文献もあることから、北京簡『老子』・清華簡『繫年』・同『金縢』のような形でよく連続する劃線を有する文献は、竹簡資料の中で一部を占めるに過ぎないものと思われる。竹簡資料全体として見るならば、劃線の記され方はかなり複雑であるとしなければならず、すべての劃線がどれも同じ方式によって記されたと理解することには無理があると考えられる(注12)。

このことは、これまで発見された戦国期の竹簡の形制が統一されてはいなかったことと合わせて考えてみても、さほど不自然なことではないと思われる。例えば竹簡の簡長を見ても、戦国期の竹簡の簡長が一律ではなかったことは明らかである。そして、そうした竹簡の形制の多様性は、竹簡の製作者の違い・地域的な違い・時期的な違いなど、さまざまな要因と関わっているものと推測される。劃線に関しても、竹簡の形制の多様性と同様に、竹簡の製作者の違い・地域的な違い・時期的な違いなど、さまざまな要因によって多様なあり方をしていたと考えられる。

そうした中で、北京簡『老子』・清華簡『繫年』・同

『金縢』の三文献において、竹筒の段階で劃線が螺旋状に記されるという、よく連続する劃線を記す一つの方式が認められたことは、劃線の全容を理解する上で重要な意味を持つと筆者は考える。

もとより、北京簡『老子』と『繫年』とでは、それぞれの連続する劃線が記されている各竹簡群に含まれる竹簡の枚数が異なる。すなわち、同一の竹筒から作成された竹簡すべて揃っていない不完整のものと考えられる北京簡『老子』上経第6劃線、及び『繫年』第7劃線の両竹簡群を除くと、北京簡『老子』の各竹簡群に含まれる竹簡は一四～一九枚であるのに対して、『繫年』の各竹簡群は一四～二六枚であり、『繫年』の方がやや簡数が多く、また簡数のばらつきが大きい。ちなみに、『金縢』において連続する劃線が記されている竹簡の枚数は一四枚である。

前述の通り、何晋氏はこうした両者の竹簡の枚数の違いをかなり重大に捉えている。しかしながら、この竹簡の枚数の相違はさほど不自然なものではなく、竹簡の作成に用いられる竹筒の大きさの違いによって生じ得る程度の差と推測される。むしろ、仮に『繫年』や『金縢』の連続した劃線が記されている各竹簡群の中に、異なる竹筒から作成された竹簡が混在しているとするならば、北京簡『老子』を含めた三つの文献において、連続した劃線が記されている竹簡の一部に、一枚の竹簡上に二本の劃線が記されているものが含まれており、しかもその劃線二本の劃線が他の竹簡の劃線とよく連続するという現象について、新たに別の説明を加えなければならないことになる。

また何晋氏は、連続した劃線が記されている竹簡の枚数に関して、北京簡『妄稽』の連続する劃線が記されている竹簡群の枚数が九枚前後であることを指摘している。本稿執筆時点で『妄稽』はその竹簡の写真等が未公開であるため、詳細は不明であるが、何晋氏が「毎組背劃線互不重合」と述べていることからすると、『妄稽』においては一枚の竹簡上に二本の劃線が記されている現象は認められないと思われる。あくまでも推測に止まるが、『妄稽』の連続する劃線の記されている各竹簡群は、北京簡『老子』上経第6劃線、及び『繫年』第7劃線の両竹簡群（それぞれ竹簡数は六枚・四枚）と同様の、同一の竹筒から作成された竹簡がすべて揃っていない不完整の竹簡群である可能性が一応は考えられる。仮にそうであるとすれば、北京簡『老子』・『繫年』・同『金縢』の三文献に共通して認められる方式の、一種のバリエーションということになろう。

何晋氏はまた、嶽麓秦簡中の『三十四年質日』・『三十五年質日』において、一本の劃線が竹簡三三・三五枚にも及んで記されていることも指摘している。嶽麓秦簡『三十四年質日』・『三十五年質日』等の劃線と北京簡『老子』・清華簡『繫年』・同『金縢』の劃線との関係については、今後更に慎重に検討する必要があるが、現時点では、両者の劃線とは、連続する劃線を記す方式が異なると理解するのが妥当と思われる(注13)。

なお、何晋氏はまた、清華簡『耆夜』の中では、竹節の位置が異なっている簡10・11・12の三簡の上に、劃線がまたがって連続して記されていたとし、このことは、竹筒が裂かれて竹簡が作成された後、多数の竹簡が平らに並べられた上で記されたものであり、劃線が竹筒の上で記されたものではないことを示していると主張している。

この点に関しては、清華簡『耆夜』の事例についての何晋氏の理解に問題があると筆者は考える。すなわち、何晋氏は、簡10の竹簡の断裂が、劃線に沿う形で起きていると見なしているが、簡11の竹簡の断裂が起きている箇所は、実は簡11の劃線とずれていることから見て、簡10の竹簡の断裂は劃線に沿う形ではなかったと理解すべきである。

これまで公開された清華簡第1～第3分冊の写真を見る限りでは、『繫年』を含めて、或る文献の中に、竹簡の竹節の痕跡の位置・数から見て異なる種類の竹簡が用いられていることは少なくない。しかし、そうした竹簡の種類が切り替わっている箇所において、それをまたぐ形で劃線が連続して記されている事例は確認できない。このため、劃線がよく連続して記されていることと竹節の痕跡から見て同じ種類の竹簡が用いられることとの間には、密接な関連があると考えられる(注14)。

最後に、木簡の背面に劃線がある場合があるとの何晋氏の指摘についてであるが、筆者も二〇一二年八月に長沙簡牘博物館を訪問した際、整理室において元館長の宋少華教授から、背面に劃線がある竹簡や木牘があるという話を直接伺っている(注15)。木簡或いは木牘の背面に劃線が認められる事例も確かに存在すると見られるが、そうした資料の公開はまだ行われていない。それらについての検討は、資料の公開を待たなければならない。

おわりに

小論では、何晋氏による韓巍氏に対する批判を手がかりとして劃線について検討し、北京簡『老子』・清華簡『繫年』・同『金縢』には竹筒の上に劃線を螺旋状に記す

という共通した方式が認められることを述べた。こうした方式の劃線が記されている文献については、北京簡『老子』の章の配列が当初は復元困難と見なされていたにもかかわらず、発見された劃線に従って竹簡を配列した結果、その章の配列は現行本とほぼ同一であることが明らかとなったことからも分かるように、劃線は竹簡の配列を復元する上で極めて重要な手がかりとなり得ると見られる。

しかし、竹簡資料全体として見るならば、劃線の記され方はかなり複雑で、北京簡『老子』・清華簡『繫年』・同『金縢』の劃線とは異なるあり方のものも多く、劃線のすべてが竹簡の配列を復原する手がかりとなるわけではない。そうしたものも含めた劃線の全容の解明は、今後の課題としたい。

注

（1）孫氏の見解については、「簡冊背劃線初探」（『出土文献與古文字研究』第四輯〔復旦大学出土文献與古文字研究中心編、二〇一一年〕所収）参照。なお、北京簡の竹簡背面に認められる「劃痕」について、後述する韓巍氏の論文に「所有竹簡的上的劃痕都細如髮絲，且十分平直，可見是用非常鋒利的金屬銳器刻劃。」と述べられており、「劃痕」は非常に鋭利な金属によって刻まれた細い線であるとされている。また清華簡の竹簡背面の細線についても、後述する李均明・趙桂芳両氏の論文「清華簡文本復原—以《清華大学蔵戦国竹簡》第一、第二輯爲例」において、「簡背刻劃斜線」と呼ばれている。しかし、筆者は北京簡・清華簡の背面を実見しておらず、清華簡の写真を見る限りでは、果たして竹簡背面の細線が刻まれたものなのかどうかを判別することができない。このため、以下本稿においては、北京簡の「劃痕」や清華簡の写真から見て取れる竹簡背面の細線を、まとめて「劃線」と呼んでおく。戦国期の竹簡の背面には、「劃線」よりもかなり太く、筆で記されたものと判断できる線が認められる場合があるが、それらについては「墨線」と呼び、「劃線」とは区別しておく。拙稿「清華簡『楚居』の劃線・墨線と竹簡の配列」（『中国研究集刊』第56号、二〇一三年）参照。

（2）初出は、二〇一二年一〇月二七・二八日に北京大学中国古代史研究中心と北京大学出土文献研究所との共催により開催された「〝簡牘與早期中国〟学術研討会暨第一届出土文献青年学者論壇」の会議論文集である。

（3）簡84・簡187の二枚の竹簡には劃線が記されておらず、他の竹簡にはすべて劃線が一本ずつ記されている。北京簡『老子』の竹簡背面に劃線がどのように記されているのかは、『北京大

学蔵西漢竹書（貳）』所収の「簡背劃痕示意図」参照。なお、北京簡『老子』上経の第2劃線の竹簡群中の簡32について、同簡に劃線は認められないが、断裂が起きている。韓巍氏はこの断裂は劃線に沿う形で起きたものと見なしているが、後述する清華簡『耆夜』簡10の断裂と同じく、断裂が劃線に沿う形で起きたわけではないとの可能性も十分に考えられると思われる。

（4）図1は、韓巍氏の論文からの引用である。

（5）『老子』上経第8劃線の竹簡群のうち、簡118には二本の劃線が記されているが、その下方の劃線は他の竹簡の劃線と連続していない。このことは、同竹簡群には同じ竹筒から作成された竹簡が揃っていないことを示すと考えられる。

（6）韓巍氏によれば、一般に劃線は、竹簡の上端に近いところのものが粗く、また深い。これに対して、竹簡の中央部に近いところのものは細く、また浅い。このことは劃線が竹簡の上端に近いところから記されたことを示しているとする。前掲「西漢竹書《老子》簡背劃痕初歩分析」参照。

（7）この他に、李均明・趙桂芳両氏は簡69の劃線と簡70の劃線とを連続するものと見なしているが、この点も問題である。簡69の右隣に簡70が位置していたと見なすよりも、後述するように同じ竹筒の上で簡69の右隣に簡45が位置していたとする方が、劃線の連続性はより自然である。また、後述する竹節の痕跡の位置と劃線との関係から見ると、簡45～69の竹簡群と簡70～95の竹簡群とでは、竹節を削り取った痕跡の位置が異なる。このため、簡69は簡70と同じ竹簡群に属するとは見なしがたい。

（8）例えば、北京簡『老子』上経第8劃線の竹簡群のように、不完整の竹簡群の中に用いられなかった竹簡が、こうした部分に用いられたとの可能性が考えられる。

（9）もっとも、『繫年』簡31～簡44（第6章・第7章）の竹簡の実寸大写真を見る限りでは、竹簡の下端の位置に若干のばらつきがあり、このあたりの竹簡には縮小が起きているものがあるように見受けられる。このため、仮に簡44が簡26～43と同じ竹筒から作成されたものであるとしても、その本来の位置を精密に判断することは困難である。

（10）竹簡正面の文字列と竹簡背面の各劃線群との対応に関しては、注1前掲の拙稿「清華簡『楚居』の劃線・墨線と竹簡の配列」参照。

（11）この他、清華簡第3分冊に収められている『赤鵠之集湯之屋』は、背面に二本の劃線が認められる竹簡は含まれていないものの、劃線が竹簡の上部において全体によく連続していること、またその枚数が一五枚であることから見て、同一の竹筒から作成されたものである可能性が高いと思われる。また『程寤』も同様に劃線が全体によく連続しており、その竹

簡はやはり同一の竹筒から作成された可能性が高い。但し、『程寤』は竹簡の枚数が九枚しかなく、北京簡『老子』上経の第8劃線や『繫年』の第7劃線の竹簡群と同様に、完結していないものと見られる。

(12) 華簡第3分冊に収められている『祝辞』・『良臣』は、竹簡のほぼ中央の部分において、連続する劃線が二本認められ、一本の劃線は右上に、もう一本の劃線は右下に向かう形でよく連続している。これらは明らかに北京簡『老子』・清華簡『繫年』・同『金縢』とは異なる方式で記された連続した劃線であると考えられる。

(13) 孫沛陽氏は、嶽麓秦簡『質日』の劃線は、すべて竹簡が作成された後に記されたものであるとする。注(1)前掲「簡冊背劃線初探」参照。

(14) 注(1)前掲の拙稿「清華簡『楚居』の劃線・墨線と竹簡の配列」参照。なお、清華簡第3分冊の『説命中』においては、連続した劃線が竹節の痕跡の位置の異なる竹簡をまたぐ形で連続することがない、という一つの例を見ることができる。すなわち、『説命中』の簡1～4の部分は、竹節の位置から見て、簡1と簡3、簡2と簡4とがそれぞれ同一の種類であり、また簡2と簡4とには劃線は認められず、簡1と簡3とには劃線が認められ、しかもこの二簡の劃線は連続すると見られる。従って、簡1・簡3と簡2・簡4とは、それぞれ異なる竹筒から作成されたと考えられる。おそらく、『説命中』の書写や編聯の段階で、本来は簡1と簡3とが連続し、続いて簡2・簡4が用いられるべきところ、何らかの理由で誤って簡2よりも先に簡3が用いられたために起きた現象と推測される。

(15) 中国出土文献研究会「中国新出簡牘学術調査報告―上海・武漢・長沙―」(『中国研究集刊』第55号、二〇一二年一二月)参照。

【附記】本稿は、科学研究費補助金・基盤研究B「戦国楚簡と先奏思想史に関する総合的研究」(研究代表者：湯浅邦弘)の成果の一部であり、筆者が二〇一三年三月より八月まで、台湾奨助金による訪問学人として台湾大学哲学系に滞在した間の研究成果の一部である。特に記して深甚の謝意を表す。